

第1回 M-1グランプリ開催報告 2005

Page 2



司会進行:酒井 扶美
(丹波ビジョン委員)

(発表順)

①どろんこ会(丹波市)ーサラリーマンが休耕田で農業を営むー

稲畑農地利用改善事業組合、通称どろんこ会で、国道175号加古川に面した平坦な集落で、明治以来99戸前後で推移してきた所で、今も商業施設や工場はありません。加古川の豊富な水と肥沃な大地に恵まれ、水稻栽培が盛ん。ぬ脱ぎ神社に奉納している稲畑式三番叟があり、夏から連日わたり練習し、秋の奉納に向けて伝統文化を村民あけて継承している。公民館に集って練習に励み、中で、世代を超えた交流につながっている。また伝統的な文化財として土人形の稲畑人形がある。200種類もある中で、有名なのは天神さんの人形。明治期まで盛んに作られたが、今は職人一人だけとなった。このため保存会を作り、人形教室を開き伝統技術を引き継ぐ活動を展開している。また稲畑には、県下でも有数の水稻種子の生産組合があり、13ha程集団化し生産している。このほか四季の野

菜づくりなど自然の資質を生かした地域づくりを展開している。少子高齢化の中で、土地を守るために、知恵亡き者は集まれ、汗を流せを合言葉に3年前にサラリーマンで、休耕田を耕し生産する「どろんこ会」を組織化。黒豆、小豆、ウコン、山の芋などをみんなで力を合わせてトトレ野菜を生産している。今年の夏には枝豆の摘み取りツアーを企画し、都市の方に楽しんで収穫に参加していただいた。長田区のバザーにも参加し活動の輪を広げている。私達は50～60代の小さな組織ですが、老人が参加できる村づくりの核となるようにがんばっていきたくて考えている。農作物の販売所設置を視野に安心安全な食材をつくりながら都市と地域との連携を図りながら、すすんで生きたいと考えている。ぜひ一度、皆さんにも稲畑に来ていただきたい。

(発表:足立雅一)



稲畑人形、稲畑三番叟の地域資源をもつ稲畑集落。集落全体で、お米、山の芋、小豆などを共同栽培し、収穫後の豆よりなどは、地域のお年寄りが担当するなど、地域全体で農業を守っています。都市住民との交流では、地域資源を活かしながら、体験農業を取り入れた取り組みを行っています。

②深江地区まちづくり協議会(神戸市)ー震災からの復興ー

芦屋市と接している。芦屋は、5階建てまでしか建たないのに深江は、高層が建つ。どうしてやという声がよく聞かれていた街だ。阪神淡路大震災では、大変な被害を受けた。地区で259名が亡くなり4300戸がつぶれた。火事は起きなかったため、マスコミにはあまり大きくは取り上げられなかった。平成2年からまちづくり協議会を立ち上げ、阪神高速の高架問題を協議してきた。当初は、庶民的な街を創ろうとしてきたが、震災後緑豊かで安全な街を作ろうと目標を変えた。ブロック塀よりも生垣を、塀の前には緑をと緑化に努めた。空地は、すぐに広告塔が設置されるので協議会が中心になって緑化を推進した。その後の協議の中で、歴史性を生かそうと西国浜街道を中心に歴史性を活かしたまちづくりを推進

している。歩く会を組織し、歴史の足跡をたどると同時に協議会も力を合わせて街道沿いの緑化を推進している。国道43号には環境防災緑地帯があるのでそれを活用して、アダプト制度で緑地帯の管理を行っている。防災まちづくりとしても子どもたちを中心に参加の輪を広げ、七夕や夏祭り等の多様なイベントを通してコミュニティ形成を図っている。学校傍に地域の掲示板を設置し、小学生の絵画を掲示するなど地域と学校が一体となって取り組んでいる。また山東町とも交流を深めている。まちづくり協議会が、自治会や様々な団体との連携を図り、深江地域のニュースを1万部発刊し、地域住民が参加するまちづくりを推進している。今後ともご指導ください。

(発表:佐野未夫)



全国の桧皮葺き職人の25%がこの地域で働いています。品質のいい桧皮が取れる産地で、伝統の技がいまなお引き継がれています。京都御所、善光寺、出雲大社などの屋根の葺き替えに関わり、日本の伝統技術保存の一端を担っています。

(発表:友井辰也)

③上久下地区(丹波市 丹波の桧皮屋根師)ー伝統技術の継承ー

桧皮葺は、有名なところでは世界遺産の安芸の宮島厳島神社、出雲大社、京都の清水寺などに葺かれている。桧皮葺はヒノキの樹皮を立ち木から剥き取り用途に応じて形や幅を一定にそろえ、竹製の釘で止めていく方法。1300年前から伝えられている。特徴的なのは今もなお、ほとんど技術的な改良を加えず継承されている点。桧皮葺のよさは、いろんな形状に対応でき曲線などの丸みを帯びたところにも可能で、自然な植物材料では、一番耐用年数に優れている点。現在職人は全国に150名の中で上久下地区には25%に当たる約40名の職人がいる。職人が残ってきた要員は、細長い狭隘な谷筋のため、広い田畑が持てない土地になっている。このため、出稼ぎせざるおえず、京都で職人として働

き手が多く出た要因と考えられる。また上久下地区は、ヒノキの素材の品質がよく、丹波で採れるのは、黒瀬皮といい、最高級品とされている。こうして上久下地区は、桧皮の里と呼ばれるようになった。桧皮の材料は、木を切らずに生きたままの立ち木から剥ぎ取り利用している。剥いても約10年サイクルで桧皮は回復し再利用できる。こうした循環利用によって屋根材料を得ている。また竹釘は30年経っても劣化することなく屋根を支えてくれている。鉄釘10年とは大きな違いだ。古くなった屋根材は、山に返し、肥料となる。私たち桧皮葺師は、日本の文化財を守る技術者として誇りを持つと同時に若い人達に地区を上げて継承している努力をしている。

Page 3



第1巻 第1号

④川代ダム野鳥愛護協会(篠山市)ー野鳥の楽園づくりー

14年前から野鳥の楽園を目指して取り組んでいる。地元の日本野鳥の会の会員である神主さんに顧問をしていただき、その人の指導の基に活動に取り組んでいる。本来野鳥は人間に対し警戒感是非常に強い。野鳥の楽園を作ろうとしてもなみたいていのではない。最低5年はかかる。昆陽池のように人に慣れた野鳥園としたい。川代ダムは、篠山川をせき止めた水の供給地。川幅100m深さ9m、4kmにわたって貯水される。平成3年完成した。冬季鴨が飛来してくるので、平成4年の10月愛護協会を組織し、野鳥の楽園づくりに着手した。川代ダム

の委員会の10自治会と賛同いただける観光協会等の6団体で組織し、500戸の人達に会員になっていただき活動している。餌付けを10月から半年間早朝に行っている。餌は、パンくずなどで、餌箱箱に入れて餌付けを行っている。毎日なので、とても根気が要る作業だが、力を合わせて継続して取り組んでいる。14年間続けてやっと野鳥の警戒感も薄らいできたように感じている。野鳥の楽園をつくる夢と生き物への思いやりを育んで、心豊かな人づくりそして里づくりにつながっているのではないかと考えている。

(発表:上野 潔)

⑤養田まちづくり委員会(加古川市)ー水質浄化のエコタン銀行ー

加古川の最下流の養田から来ました。まちづくり活動を報告したい。1999年からトライアルウィークで旧養田川の生物調査を行っている。その後も毎年継続し、生物調査を続けている。区画整理事業が4年前に始まり、旧養田川が直線の三面張りの河川に改修することとなった。工事の着工直前子供理解学という市長と対談する取り組みがあり、中学生に20数種類もの魚分類が生息しているのが三面張りにすると生き残れるのかどうかの問い合わせを行った。中学生の思いが行政を動かし市長の了承をとった。側面はコンクリートになったが、底面は残すことになった。2002年に通水式を地域で行い行政の方々にも出席していただいた。川の水質浄化を

同時に行うため、エコタン91という炭の水質浄化装置を購入し取り組んでいる。加古川水系の29の支流の水質浄化に取り組み、現在も継続して取り組んでいる。ホテルの幼虫の放流や、竹炭の設置、2003年の3月にはエコタン銀行を設立し、同時に公会堂も増築し、市民フォーラムを開催した。養田のまちづくり委員会とリパーククリーンエコタン銀行が、連携をとりながら、他地域との交流を推進している。子ども達の環境教育や情操教育にも寄与している。国土交通省とも連携をとり、近隣高校生なども協力してもらい、300名もの参加を得て水辺のクリーン作戦を展開している。まちづくりの勉強会や中村町等、他地域との交流も推進している。(発表:小田 稔)



地域でトライやるウィークを受け入れたことがきっかけになって、区画整備事業にともない廃止となる川をせせらぎとして再生し、自然とふれあえる空間として地域に残しました。間伐材、不要竹を炭にして、水質浄化に役立てる取り組みも進めています。兵庫の川サミット、ひとはくキャラバンの開催など、加古川流域全体の交流の場づくりにも力を入れています。

⑥福田おいやか村(丹波市)ー田舎のリゾートづくりー

福田集落は1659年内山集落として7戸立地していた。明治21年には25戸119名の人口を有していた。現在は16戸50人が住んでいる。うち1戸は都市の住民の移住に伴う5戸はセカンドハウスとして購入していただいている。神戸市の北神星和台団地との交流を推進しており、一緒に神輿などを担いで秋祭りに参加していただき近隣住民を含めた福田の収穫祭として活性化に取り組んでいる。また福田は、内山栗と呼ばれる丹波栗の産地として知られ、昭和30年頃には缶詰の共同出荷にも取り組み、昭和40年代からは観光栗園として9月中旬から10月中旬まで開園している。平成16年の4月おいやか村を設立し、山間僻地で高齢化もすすんでいるため、それに対処し都市と農村の交流促進と地域の

活性化を目標に取り組んでいる。その中で、休耕田を利用し、サツマイモ堀やそば打ち体験に2年前から取り組んでいる。福田で収穫したそばを使って今出川のそば処から講師を招き行っている。そばについては、福田のひとつの収益作物そして交流促進に役立てたいと考えている。福田地域は、奥まった山間地であり、まとまった自然豊かな郷を形成している。夜には鹿とイノシシが出没し、自動販売機さえも備わっていない村であり、昔ながらの自然が残っている地域です。こうした田舎こそができるふるさとのリゾートとして貸し農園化しありのままの田舎を満喫して欲しい。高齢者も生きがいの持てる丹波弁のおいやか(のんびり)にふさわしい里づくりを推進したい。

(発表:前田利郎)

●審査講評

・全ての発表をお聞きし、どれもすばらしく皆さんにグランプリを差し上げたい。いずれも方向性は違えども地域で大切なことを着々と住民自ら取り組んでいることに深い感慨を持った。会場の方々を含め互いに情報交換し、これから里づくりに取り組んでもらいたい。グランプリの「岩崎村づくり委員会」は、活動始めるに当たっての心構えや合意形成のプロセスが鮮明に報告され、後に続く人達にも非常にわかりやすい点が高く評価された。「日置里づくり協議会」は、子どもも巻き込んで女性等の住民が一丸となって取り組み、魅力づくりに知恵を出し合っている点と今後の可能性が評価された。「深井地区のまちづくり協議会」は、震災を契機に人のつながりを大切にしなが国道43号の沿道をはじめ花づくりに取り組んでいる点が評価された。昔は火消して今は火付け役の「福本お役に立ち隊」は、その発想の自由さと自由闊達な愉快な足をつけた活動が評価された。

審査委員長:大冢潤一郎(東京大学教授)、審査委員:中川隼之(兵庫県まちづくりセンター)、宮下栄一(丹波県民局)、坂東隆弘(NPO法人たんばぐみ)